

3. チームオレンジの設置に至ったプロセス

- ・平成19年度より認知症サポーター養成講座を開始。現在までに延べ約2万人ものサポーターを養成。しかし、認知症の理解に留まり、認知症の方や家族へ支援に結び付く仕組みには繋がっていなかった。令和元年の認知症施策推進大綱を機に、令和3年度からチームオレンジの構築について検討を行った。
- ・令和4年度、1つの包括圏域をモデル地区とし該当包括と協議開始。ステップアップ講座を開催するにあたり、参加予定者と講座の内容を検討。また、チームオレンジに関する意見や疑問点について地域住民と医療保健福祉関係者で協議した。
- ・令和4年度は、ステップアップ講座を1回実施。54名(住民26名、職域28名)のサポーター登録あり。その後はサポーターのみなさんと定例会を実施し活動報告や意見交換を行った。
- ・令和5年度は、2包括圏域を対象にステップアップ講座実施し、新たに27名のサポーター登録あり。
- ・令和6年度は、3包括圏域を対象にステップアップ講座を実施。新たに20名のサポーターが加わり、101名の登録者となる。

4. 活動内容

個別支援: 6件 内容: 地域のサロンや老人会の付き添い、声掛け・見守り支援、話し相手、外出支援、囲碁の相手、認知症の人(サポーター)が本人の集いの参加者への相談等を行う。

地域の集いの場に参加
認知症カフェの支援。サロンへの参加協力。認知症に関する講話の講師としての役割。

5. 活動を進めて行く上で工夫したこと・配慮したこと

・令和6年度から、認知症サポーター事業を委託していた福祉活動プラザへ、チームオレンジ事業も委託。認知症サポーター養成講座から、ステップアップ講座へとスムーズにつなげるように工夫した。

6. ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

- ・令和4年度1回開催。内容: チームオレンジについての説明 当事者からの話 認知症の人への接し方等
- ・令和5年度3回開催。内容: チームオレンジについての説明 当事者からの話 認知症の人への接し方 活動事例紹介 グループワーク等
- ・令和6年度2回開催。内容: チームオレンジについての説明 認知症の人への接し方 活動事例紹介 グループワーク等

7.活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

【効果】

- ・モデル圏域だったサポーターは、生活支援コーディネーターや地域包括支援センターとの連携で、コーディネーターを介さずに自発的に活動ができている。
- ・一部ではあるが、MCI～軽度認知症の人への社会資源としてのチームオレンジと発展している状況。包括等へ相談があった場合にタイムリーにつなぐことができる事例が増えた。
- ・住民・職域サポーターが連携し、本人への生きがい支援や見守り支援、サロン活動へのつなぎ等、住民サポーターだけでは不安な部分も一緒に行うことで軽減できている。

【課題】

- ・生活支援コーディネーターや地域包括支援センターが中心となって、すでに地域づくりの仕組みが構築されており、チームオレンジコーディネーターの介入なしマッチングが進んでいたケースもあり、それぞれの役割を再確認する必要がある。
- ・個別支援を進める中で、チームオレンジの活動範囲の設定や活動費等の課題が発生してくると思われる。
- ・銀行やスーパー等の職域サポーターの登録者が少ない。
- ・第1類型 共生志向の標準タイプの設置には至っていない。
- ・サポーターとして登録をしたものの、活動の場が限定され、未経験のサポーターも大勢おり、認知症の人のニーズをつかんでマッチングさせるのが課題。

8.チームのアピールポイント

- ・相談内容によっては、認知症の人と当事者サポーターとのマッチングも行っている。
- ・よく地域のことを把握した民生委員やサロンリーダー、生活支援サポーター等がチームオレンジサポーターとしており、お困りごとなどキャッチしやすく、対応も早期にできる。
- ・医療機関や介護保険施設、地域包括支援センター、行政も含めて様々な職域(職種)サポーターがおり、助言や支援者へのサポートもできる。本人の生活がよりよくなるように、みんなで考えることができている。

9.今後の活動について

- ・委託先のコーディネーターと連携しながら、市内全体に広がるように、令和11年度までに全圏域でのチームオレンジ構築に向けて取り組んでいく。
- ・今年度初めて市内8か所の認知症カフェ交流会を実施。それぞれに特色がある活動をされており、その中で、今後、チームオレンジとしての機能を持たせた認知症カフェに移行できるかどうか、みんなで考えていきたい。